

## 2016 年度日本語教育実習 最終レポート

今回、3年分の自分の提出してきたレポートを見直して一番に変化を感じたのは、自分の日本語教師教育に対する熱意です。大学1年生の時のオリエンテーションで日本語教師に興味を沸き、日本語教師課程を専攻しました。大学入学当初から、もともと教師に興味があったのですが、英語教員ではなく日本語教師を選択したのは興味本位でした。ですが、3年間日本語教師について学び、実習を通してきたことで、自分の中で「本当に日本語教師という職に就きたい」と思う気持ちが出てきました。これが最も大きい変化です。熱意以外にも、自分のレポートを見直していると変化がいくつか見られました。

1つ目は、アイコンタクトについてです。1年生の時に提出したレポートで、私はアイコンタクトを重要視していました。アイコンタクトには、意思疎通をする働きがあり、学習者のちょっとした不安や反応を見ることが出来るからです。1年生の時のレポートに「心地よいアイコンタクトの分量は話している時間の内 60%ぐらい相手を見つめることが望ましい」とありました。実際に3年生で実習授業を行った時に、アイコンタクトの大切さを再度実感できました。最後の北九州 YMCA での実習では、アイコンタクトがきちんと出来ていたのではないかと感じました。1年生の時から注意を払っていたことが、気づけば改善されていて、自分の成長を感じました。

2つ目の変化は、1年生の時よりも今では授業をすることに「恥」を感じなくなったことです。以前授業で15分ほどのマイクロティーチングを行った際、恥ずかしがっていて声が全然出ていませんでした。ですが、北九州 YMCA での実習の時は、比べものにならないくらい声も出て、堂々と授業が出来ていたように感じます。以前提出しているレポートの中でも教師の声の大きさの重要性について触れていましたが、教師の出す声の大きさによって学習者の声の大きさも変化しますし、授業のテンポも変化します。日本語教員課程のおかげで、他の授業でプレゼンテーションをする際も、ゼミで模擬面接を行った際も声の大きさを注意を受けることがなくなりました。また、声の大きさを褒められることもたまにあります。とてもいい影響だなとしみじみ感じます。

3つ目は、学習者視点だけではなく教師側の視点にも立てるようになったことです。まだ全然授業もしたことがなく教科書だけで日本語教師が行う授業について学んでいる時は、「こんな授業は嫌だ。」「楽しい授業でないと飽きる。」などほとんど学習者側の意見ばかり、レポートの中に書いていました。学生である自分の視点は、教師側からの視点では気づかないポイントも多くあり、それ自体ユニークで大切なものです。しかし、学習者側と教師側の視点の両方を持たせた方が、いい授業作りにつながると感じています。3年目で、前期はウィンチェスターの学生たちを相手に、後期は北九州 YMCA での学生たちを相手に授業を行い、教師体験をしました。この体験により、想像だけではなく、実際の教師側の視点でも考えられるようになりました。そのおかげで、北九州 YMCA で授業を行う際には、学習者側と教師側らの考え方を比較しながら、双方にとっていい授業を作れるように取り組み

ました。

この「学習者の視点」ですが、日本人の学習者と外国人の学習者とでは異なっているのではないかと、実際に授業をしながら感じました。外国人の学習者たちは日本人の学習者たちに比べて、教師のちょっとしたトークや表情をしっかりと観察しているように思えました。それは、きっと私が外国語の授業を受けている際に、海外の教師が話す外国語を耳だけでなく表情からも理解しようとする姿勢と同じようなものなのかな、と思います。特に、今回北九州 YMCA で教えた学習者たちは日本語初級のクラスでしたので、なおさら耳だけでは難しかったのではないのでしょうか。

また、自分の提出した過去のレポートの中に、「自分は表情が一定であり変化がないので、肯定や否定がわかりにくい」という記述がありました。ウィンチェスターの学生たちに教える最後の授業の DVD を見てみると、真顔のせいで怖いイメージのまま、たんと授業をこなしている自分がいました。3年間を通して、「自分は緊張してしまうと笑顔になり、慣れ、自信がつくと、表情が真顔で暗くなってしまう」ことに気づいたので、表情の変化を付けることも、今後の自分の課題です。違う授業で表情筋を柔らかくし、表情の変化をつけやすくする方法を習ったので、鏡の前で練習して改善していきたいと改めて感じました。

逆に変わっていないこともありました。

1つ目は、教案の書き込みの多さです。自分はアドリブが効かないタイプで心配性なので、昔から教案に文字が多かったのですが、実習を数回通して教案を作成してみて、変わっていないと感じました。最初の方の実習では、教案ばかり見てしまって学習者をきちんと見ることが出来ていないことがありましたが、最後にはほとんど教案を見ることなく、注意点を多く書いていることで、教案を自分の授業前の再確認用として使用できていたので、これは今後も続けていきたい点だと感じました。

2つ目は、自分がティーチャートークを苦手としていることです。教材を黒板に貼ったりするちょっとした時間の沈黙や導入のときのティーチャートークが、提出してきたレポートを見直しても苦手だということが理解できました。また、これまでの実習や授業を通して、あらかじめ準備しておいた通りの受け答えしかできない自分に気づきました。それを改善するためには、常日頃から会話をするときを意識して、友達だけではなくいろいろな年代の人と会話をして鍛える必要があります。ティーチャートークが面白いと学習者も授業を楽しんで受けることが出来、また、学習者と教師間のコミュニケーションも多くとれ、信頼が生まれます。年代や国によってティーチャートークの仕方も変わってくると思うので、これは生涯の課題だと今回3年間を見つめ直して感じました。

3つ目は、楽しい授業にしたいという意気込みです。以前提出したレポート内にも記述しましたが、面白い授業の方がインパクトがあり、学習者の学習に対する意欲も上がります。ですから、北九州 YMCA で授業をした際は、グループワークやアクティビティを多く取り入れました。1年生の時に聞いた、「学習者が授業中に寝るのには、教師側にも責任があ

る」という横溝先生の言葉が記憶に深く残っています。楽しいだけで身にならなければ意味はありませんが、徐々に楽しくて学習者のためになる授業をできるようになりたいです。

日本語教員養成課程で学んできた全てのことは、日本語教師にだけでなくどんな職業でも人間関係にでも役に立つと私は考えます。横溝先生を筆頭に授業中に見てきた日本語の先生方、北九州 YMCA で出会った日本語教師の方たちは、話し方からも異文化間コミュニケーションで学んだ「日本語のやさしさ」が伝わってくるように感じます。3年間で身につけた全てのことを活かし、上手いだけの授業ではなく、学習者と信頼関係を築ける教師に、そして日本語の美しさ、やさしさを伝えることのできる日本語教師になりたいと、改めて感じました。